

ナラティブ・エクスポージャー・セラピー（ Narrative Exposure Therapy:NET）による複雑性 PTSDの治療 日本における効果と適応の検討

著者	道免 逸子
学位名	博士(文学)
学位授与機関	甲南大学
学位授与年度	平成29年度(2017年度)
学位授与番号	34506甲第103号
URL	http://id.nii.ac.jp/1260/00003079/

氏名・本籍	道免 逸子（大分県）
学位の種類	博士（文学）
報告番号	甲第 103 号
学位授与の日付	平成 30 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
論文題目	ナラティブ・エクスポージャー・セラピー （Narrative Exposure Therapy:NET）による 複雑性 PTSD の治療—日本における効果と適応の 検討—
審査委員	（主査） 教授 森 茂起 （副査） 教授 富樫公一 （副査） 教授 西 欣也

論文内容の要旨

本論文の目的は、ナラティブ・エクスポージャー・セラピー（Narrative Exposure Therapy、以下 NET）の、日本の心理臨床現場における適用可能性を検証することである。

精神病院に長年通院・入退院を繰り返し、情緒不安定で自傷・自殺企図の傾向が高く、安定した治療に乗りにくい患者には、原病に PTSD（心的外傷後ストレス障害）が併存することが多い。子ども虐待や DV、いじめ等長期的反復的な被害から生じる複雑性 PTSD は、PTSD の中核症状に情動調整の困難を伴い、原病の症状を増幅し治療を困難にしている。

NET は、曝露療法に証言療法を組み合わせた PTSD 治療のための認知行動療法である。馴化による恐怖反応の消去と全人生史の構築による自伝的記憶整理は、特に複雑性 PTSD に有効とされる。NET は、国際的ガイドラインで複雑性 PTSD に対する有効な治療法として推奨されている。日本では 2010 年に試行的に導入され、次第に実施例が増加しているが、さらに系統的な導入を図るべき段階に至っている。本研究は、今後の普及の準備として、日本の臨床現場における NET の有効性を検証しようとするものである。

この目的を達成するために、道免氏は、まず第 1 章で、PTSD および複雑性 PTSD、解離、自伝的記憶、複雑性悲嘆という、NET の治療メカニズムに関係する諸概念について、近年の診断基準の改訂状況も含めて概説する。そのうえで、開発者が提示する NET の技法とそこに含まれる治療的要素を記述する。第 2 章では、まず、NET が PTSD に対して推奨される治療技法として、ISTSS をはじめとする関係機関の近

年のガイドラインで紹介されていることが示される。そして、現在までの先行臨床研究を網羅的に調査し、戦争や武力紛争という「組織的暴力」に由来する PTSD への治療実践とその効果検証研究が行われてきた経過と、近年、通常の医療機関における市民生活由来の PTSD 治療に対象を拡大していることを明らかにする。効果検証結果には、PTSD への効果だけでなく、併存するうつ症状、BPD（境界性人格障害）症状、解離症状などの軽減が報告されていた。

第3章では、実施された NET による効果検証の結果が報告される。治療実践を行った臨床機関は、精神病院外来と大学心理相談室であり、対象者は複雑性 PTSD と診断された 14 名（精神病院 12、大学相談室 2；女性 13、男性 1；平均 38.1 歳）である。複雑性 PTSD の併存症状として、うつ病、双極性感情障害、BPD、アルコール依存症、摂食障害、複雑性悲嘆、解離性障害、適応障害、線維筋痛症があり、通院歴は 0～23 年、入院歴は 0～33 回であった。実施者は NET 研修を受けた臨床心理士で、面接頻度は週 1 回～2 回、NET 回数は 8～46 回、平均 27.4 回であった。

効果評価のために用いた症状評価尺度は、PTSD 症状に IES-R と CAPS、うつ症状に SDS、解離症状に DES を使用し、NET 実施前、実施 2 週間後、3 ヶ月後、6 ヶ月後、1 年後に評価した。

症状評価尺度によって実施 1 年後に評価された治療効果は、以下の通りであった。IES-R の Cohen's d は 2.972、CAPS の Cohen's d は 2.587 であり、PTSD 症状が著しく軽減したことを示す結果であった。IES-R 得点は、14 例中 6 例において、過去の出来事から影響を受けていないと判定される水準までに低下した。他の例においても 1 年間を通じて漸減傾向にあった。CAPS は実施の負担から 6 例のみに実施された結果である。PTSD の 3 大症状以外の、罪悪感、注意減退、非現実感、離人感においても症状が軽減していた。うつ症状については、NET 実施 1 年後の SDS の Cohen's d は 0.953 であり、明らかな軽減を示す結果であった。ただし、PTSD 症状と異なり、6 ヶ月後では軽減が少なく、効果が得られるまでに時間を要した。解離症状では、低得点に偏った偏りの大きな分布であるため、いくつかの指標によって結果が示された。BPD 症状の著しい軽減は先行研究と一致するものであった。他の併存症状にも軽減が見られたが、アルコール依存への効果は明らかではなかった。

第4章において道免氏は、第3章で確認された症状評価尺度上の全般的効果を踏まえて、本研究から得られた NET 実施上の知見を提示し、考察を加える。

解離症状の軽減が大きかったことは先行研究と一致する。治療前に解離傾向が高かった例では、すべて治療過程で新たな記憶の想起があった。解離傾向が少なく侵入症状の強い例では、NET の進行に従って侵入症状が速やかに軽減し、症状が及ぼす苦痛が軽減することを実感するのに対し、解離傾向の高い例では、解離されていた記憶や感覚が繋がってくる第1段階から、喪失体験への直面から生きづらさを改めて感じる第2段階へ進んだ時点で、安全の確保と共感的・支持的環境とともに感情の重要性に関する心理教育が必要である。特に環境調整が重要と考えられた。そ

れら留意点を有するものの、NET には、記憶整理の効果、人生を理解されることによる愛着外傷への治療効果、言語化能力の向上による対人関係改善などの効果が期待でき、解離症状を併存する PTSD の治療に有望な技法であると考えられた。

BPD 患者の 60% には PTSD が併存すると言われるように、BPD の診断名を持つ患者の PTSD に対する NET の有効性を指摘する文献が増加している。本研究は、BPD 治療を直接対象としたものではないが、14 例中 7 例に、BPD 周辺の症状があった。孤独感や不安定な対人関係を特徴とするそれらの例について、治療中の語りを整理すると、治療中および治療後のフォローアップの中で、交友関係を楽しめる、一人の時間を楽しめる、怒りがコントロールできるなどの症状軽減を示す内容が多く見られた。これらの知見および先行研究の知見を総合し、道免氏は、PTSD を構成する恐怖ネットワークと、過去の体験に由来する怒りのネットワークの相乗効果から症状を理解し、人生史の整理という目標を共有することで、対等な関係の中で治療に取り組む道を開くことができると考察する。

NET が対象とする PTSD 症状を有する患者には、死別体験を有するものが含まれる。NET 後に悲嘆を扱うグリーフワークを組み合わせる方法を有効とする先行研究も存在する。今回対象とした例の中にも、近親者との死別による重い悲嘆を伴う例があった。この例に対してグリーフワークに取り組むことによって、うつ症状が軽減されたことから、死別を伴う例に対しては、NET だけでなく、グリーフワークを治療計画に組み入れることが有効であると示唆された。

以上のような検討の後、道免氏は、第 5 章の総合考察によって全体を総合した上、NET には多くの治療的要素が複合的に組み込まれていると指摘しながら、NET で扱えない要素を以後の治療で扱うことの必要性、安全を確保することの重要性、普及のためのスーパーバイザーの育成の必要性を指摘する。最後に、事例数による限界、比較対照群を持たないことの限界、評価尺度の不足という本研究の限界を整理し、さらなる効果検証の必要性を述べて論文を締めくくっている。

審査結果の要旨

前項のように、本論文は、日本に導入されつつある NET 技法の有効性を、臨床現場で検証したものである。本研究に類する日本における効果検証がまだ他に存在しないことから、その試みは極めて高く評価される。臨床現場において、新しい技法を導入するための連携関係を築き、倫理的配慮を十分行って臨床研究を開始することの困難を考えれば、本研究を実施し、様々の調整を重ねながら粘り強く 14 例の治療実践を行ったことは、提出者が実践家、臨床家として高い力量を有することを示している。

論文は、先行研究の詳細な検討を踏まえて、技法の紹介を含む適切な方法提示、適切な統計的処理と、治療経過の質的検討を合わせた結果の提示、臨床家としての

豊かな経験を踏まえた臨床的課題の議論と、着実に論述を積み重ねており、多くの臨床家が参照すべき内容となっている。その質の高さへの評価は、審査者の一致するところであった。

他方、審査過程において、NET を日本の臨床現場に導入することによって検討されるべき論点の整理の中で、文化的側面、人間関係の特質による海外との差異などに触れられていないことに対して批判が加えられた。また、NET が有する治療的要素に関しては、さらに詳細な質的検討によって明らかにすべき点があるという指摘もなされた。

なお本審査においては、本論文の第2章に相当する内容が『トラウマティック・ストレス』に、第3章に相当する内容が、『サイコセラピー研究』に掲載された4編の論文として、それぞれ査読を経て合計5編の論文として発表されていることも判断の参考とした（うち4編は筆頭著者）。『トラウマティック・ストレス』はPTSD治療に関する論文の掲載誌として日本で最も高い水準にある学術雑誌であり、『サイコセラピー研究』は心理療法に関する論文の掲載誌として代表的なものである。その修正要請による改稿を経て掲載に至ったことが、本論文の中核部分の質の高さを保証している。

本博士論文は、綿密な事前指導を行い、修正を経たものが10月23日に提出された。その後、各審査委員の審査を経て、1月15日に公聴会を開催し、その他の専攻教員も含めた審査を行った。それらの中で上記の批判への対応を含め、申請者の応答能力が確認された。その上、審査員による最終審査会議を経て本報告をまとめた。

以上の審査結果を総合して、審査委員会では3名の審査委員、全員一致で本論文提出者、道免逸子氏が、博士（文学）（甲南大学）の学位を授与されるにふさわしいと判定する。